

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

亡き人のベッドをみがく蕭々と静養室にひびく秒針
度(千曲市) 関 津和子
度の合わぬ眼鏡をかけるいつの夢は残らず雨に流れよ
(松本市) 堀内 悠子
「飛べ、飛べ」とほうきに向かい呼びかける小さきふたりの魔法の午後よ
(佐久市) 高橋衣里子
老人はあまり言わない「めっちゃいい」「素敵ね」「綺麗ね」「嬉しいね」と言う
(長野市) 松本 博人
おりおりと義弟からの絵手紙は「夫の気配漂わせ」
(佐久市) 橋詰美代子
雨だねと寝返りをうつ夫のいて手術の後の安堵が
(長野市) 近藤 光子
みしむ
足の指の霜焼け痒し 思出す義母の介護の二年を
(麻績村) 塚原ふじ子
実らずに暑さに負けた青大豆二十年間で初めてのこと
(小諸市) 尾沼美枝子
「感心ねえ」娘言いたり三回聞いたけれど一言一句同じと
(木祖村) 佐々木千代子
「いい夫婦」「いい風呂の日」の言葉あり「いい世の中の日」訪れを待つ
(松本市) 古藤 良枝
「イクメン」とう言葉生まれる以前から実践していた「夫はさすが」
(長野市) 島田 怜子
ふだん着を気楽に着こなす心にて「ありがとね」を常に言いたし
(駒ヶ根市) 堀沢 春子

第一首、老人施設内の静養室か。看取りの時期に入ってしまった人とお別れの後、ベッドを清めながら、その人のことを偲ぶための静謐。第二首、いつもは忘れている「夢」が見えてしま

ったのだ。結句の強さが心に残る。第三首、たのしい魔法の時間はあっという間に終わる。そんな切なさで作者は幼子たちを見る。第四首、大雑把に感覚的に、ではなく、丁寧に言いたいのだ。

小池 光 選

改札で転びし女性に手を伸ばし声をかけしは異国の若者
(安曇野市) 細川 恒
八十路過ぎ友逝く報の多かれともうひと息と大根
(伊那市) 竹松 徳門
抜く吾
草食で水溶性のわたくしをいまバスタブに沈める
(上田市) 杏乃みずな
ところ
十一月八日は遠く開戦に胸躍らせし少年も老ゆ
(千曲市) 上原 博司
たちまちに痺せしからだにあらはれて書景勝の解説確か
(長野市) 原田 浩生
あおだもの裸木かすかに揺れている満るばかりの茜を浴びて
(長野市) 近藤 光子
逆光にキラリ輝く大屋根は先日逝きし煙草の家
(長野市) 松本 博人
静いのかかった妻旅立ては良きことばかり心に浮かぶ
(松川村) 岡 豊村
枯れ葉散る一葉ひと葉が話し合い「ぼつぼつ行くか お先にどうぞ」
(佐久市) 水間喜美子
かあさんが生きてみんなを笑はせる声が聞こえた目覚める前に
(塩尻市) 藤森 円
佳作
跨線橋から夜空を見上げ少年はひとりぼつちの星を探がして
(東京都小平市) 真鍋 真悟
ブランコを見るとやつぱり漕ぎたくて七十六の心を揺らす
(松本市) 田中しほす

第一首、転んだ女性に手を差し伸べたのは異国の青年だった。こういうつながりを大切にしたい。善行に国境はないのだから。第二首、具体的に生きるさまを述べた結句がよい。友は旅立てど生きる

わたしは煙の大根を抜く。第三首、感覚的歌で若々しい。草食系で水にもよく溶けるようなわたしを大切に、日々をすごしている。おもしろい。第四首、終戦の歌はよく見るが開戦の歌は少ない。

小島 なお 選

わたくしが眼りに落ちていた時間神は囁をむかえにきたらし
(千曲市) 関 津和子
人の歌見てはすこいと声もれる家の中にはからあげのおい
(東御市) 今井 格吾
千円は大きい方と受ける釣そでもないねとレジの娘に言う
(千曲市) たじまたける
テリトリと護りて二人の長き夜霧降り降る耳聴く
(長野市) 近藤 光子
おり
冬空にレンズを向けて再会す光り輝く谷村新司
(小諸市) 星野 直人
シリウスは昇るかなかな冬が来るガザに転がる石も冷ゆらむ
(東京都小平市) 真鍋 真悟
不用意な言動あらばたちまちに黒雲湧きて行く手を閉ざす
(松本市) 小松 久志
探めているフードコートの真ん中で子はバスタ親はそばがいいなど
(伊那市) 赤羽 正彦
幼き日「おれの人になりたい」と言ひし息子は社会福祉士
(東御市) 清水 恵子
朝刊を卓に広げる我となり旅の余韻に浮かされもして
(安曇野市) 西村 静子
佳作
「津軽海峡冬景色」の歌謡碑の前に旧き友等と四人写さる
(小諸市) 篠原 昭枝
あの日から止まった時計・二時一分・みなとみらいの大観覧車
(松本市) 可能レーベル

第一首、夜のあいだに囁は亡くなった。物語のように語られるひとつの死は、私たちのための寓話である。第二首、予想外の下句。良い歌を見、美味しいものを食べる。健康で文化的な生活がここに。

第三首、お札は大きい方で小銭は小さい方と言う。常套句へのユーモラスな切り返し。第四首、適切な距離は互いの心の平穏を保つ。窓の外、そして相手の気配に耳をそばだてる繊細なふたりの夜。